

序論：呪術的实践＝知の現代的諸相

——科学／医療／宗教／その他の实践＝知との並存状況から

川田牧人

この特集は、2014年7月12日に京都大学で開催された京都人類学研究会シンポジウムを出発点としている。このシンポジウムの根底には、現代世界において、呪術はいかなる位置をしめ、また現代の知識／実践の諸環境において、いかなる有効性を発揮しうるのか、といった問題意識があった。この特集ではこのような問いを掘り下げるために、「実践＝知」という視角から現代世界における呪術を捉え、それが科学や宗教、医療など〈近代〉によってもたらされたとされる呪術以外の実践＝知といかなる並存状況を生成させているのか、また、そのような並存状況はいかにして現代世界を構成しているのかを考えた。シンポジウムの登壇者は3名ともこの特集の執筆者であるが、当日の発表とフロアディスカッションをふまえ、さらに背景にある「呪術的实践＝知というものが、〈近代〉と接することによって、我々の現代世界における生活をいかに生成させてきたか」という根源的問いを深めている。

まずこの課題にいたった経緯を説明する。

この特集の執筆者3名と筆者は、2012年に刊行された『呪術の人類学』[白川・川田編 2012]の執筆者であり、その書に成果を結実させた共同研究でも数年間の議論を重ねてきたチームである。シンポジウムとそれを受けてのこの特集は、この『呪術の人類学』を土台にしながら、それ以降の動向もふまえようとしたものである。

『呪術の人類学』は、アフリカを中心とした1990年代以降の妖術／呪術研究のモダニティ論に刺激を受けて編まれたものだった。日本国内では、『呪術化するモダニティ』[阿部・小田・近藤編 2007]や、それに先立つ埼玉大学での集中セミナー（2003年）、さらには1990年代に行われていた「マジックセミナー」（その成果の一端は[関ほか1997]）などからも影響を受けている。これは、文化人類学のおよそ100年の歴史をざっと振り返って何度目かにあたる呪術研究の活性期であったといえる。

人類学研究の草創期である19世紀末の進化主義的呪術研究は、呪術を科学と宗教の「残余カテゴリー」として位置づける傾向にあった。つづく機能主義・構造機能主義の時

代には、第一期とおなじく呪術を「他者の信念」として扱いながら、そこに当事者なりの意味を見いだす研究が展開された（この時期の完結は、一応、メアリ・ダグラスが1970年に編んだ論集のあたりまでとみなしておく [Douglas ed. 1970]）。これらの時期につづいて起こった第三の興隆期が、さきほどあげた1990年代以降ということになる。この時期の大きな特徴は、呪術に「他者性・異質性」ばかりを見いだそうとした先の二つの時期とは異なり、現代世界を生きるわれわれとの「同時代性・共通性」へと向かう傾向がみられることである。いわく、呪術とはグローバルな世界の動向と連動したきわめて動態的なものであり、それまで言われてきたような静態的伝統の産物であるどころか、近代を構成するものとしての呪術、近代の所産である呪術、いわば「近代によって創られる呪術」という性格が浮き彫りにされたのである。第二期までとは異なり、呪術をわれわれの側の問題として捉えているところは、大きな転換であった。

しかしこの「呪術のモダニティ論」に対しては、さまざまな課題がつけつけられている。たとえば、グローバル化、資本主義の進行、社会的不平等などに関連づけて呪術が解釈されるいっぽうで、それらがそもそも信じられ行われている実践そのものの中身の議論が等閑視されているという批判や、当事者の頭越しになされる、表現行為としての読み替え作業に対する批判、ある行為の解釈を前提として、その先の目的論的議論を無理やり展開させてしまうことへの批判など、浜本満がきわめて明晰に述べている [浜本 2007]。またブルース・カフエラーはその論集タイトルに端的に示しているように、呪術をアカデミックな合理的カテゴリーにあてはめ（「抵抗」とか「説明体系」とか）、合理的な解釈が施されることに批判の矛先を向ける [Kapferer ed. 2003]。これらの批判とも共奏しながら、「呪術に関係する事象とかかわりをもつ人々にとって、それらの事象が具体的にどのようなものとして経験されたり実践されたりしているのか、あるいはリアリティをもったものとしてたちあられているのか」 [白川 2012:15] という呪術研究における「当事者」問題ともいえるべき『呪術の人類学』の立脚点がかたちづくられたのである。

『呪術の人類学』においては、このような当事者の内在的ロジックを掘り下げることは、究極的には「呪術とはなにか」という核心の問題にせまることであると考えた。そしてこの問題を具体化するために、「…とわかっている、でもやはり×××」というフレーズに焦点をあてた。このフレーズは、「自分はガンだとわかっている、でもやはりお祓いに行く」とか、「仮面舞踊は生身の人間がかぶって踊るものであることを知っている、でもやはり先祖の霊がそこにいる」というように、呪術の思考と実践の核心部分にあると考えられる。そしてこのフレーズを、「経験と非経験、合理と非合理をつなぐものにとらえるのではなく、「とわかっている」を信と知に、「でもやはり」を行為にふりわけること」 [関 2012:105]、すなわち知識と行為の架橋もしくは跳躍として捉え直すことを中心課題とした。さらにここから、可視性や触知性といったマテリアリティに根ざした呪術のリアリティや、日常的実践との対比にたった呪術的实践の理解といった、さまざまな論点が展開された。

そのいっぽうで、十分に検討しつくされたとはいいがたい点、あるいは、今後さらに展開できそうな課題として、つぎの二点が大きく焦点化された。

- (1) 呪術的諸実践と隣接する諸実践（科学、宗教など）は、かならずしも十全に議論がつくされたとは言いがたい。
- (2) 触知性や物質性の先には、「感覚の人類学」やマテリアリティ研究との接合領域が展望できる。

これら二点は無関係なのではなくお互いに関連し合って、現代世界において呪術を問う視角を形成していると考えられる。それこそが冒頭にあげたような本研究の課題、すなわち、類似したり関連したりする諸実践＝知の併存状況において呪術的实践＝知はどのような個別性と共通性をもつのかという問題、および、さまざまな人間の活動領域における知覚・感覚的経験は呪術のリアリティの在処としていかに捉えうるかという問題である。

本研究で用いる概念について、まずは「実践＝知」について手短かに述べる。

この語は、実践共同体論や状況認知論においては“知識は実践のなかにこそあり”という意味で用いられ、何らかの活動現場に即して実践を紡ぎ出す能力という用法が一般的であろう。知識が優勢なのか実践が先行するのかといった議論が激しくたたかわされることも多いようだが、本研究では、それとは文脈を違え、「感覚的次元や信念の次元までを含み込んだ行為と知識の双方にわたる概念」として、便宜的に用いている。かつての研究では「呪術的諸実践」と称していたが、「…とわかっている、でもやはり×××」というフレーズが知識と行為の架橋もしくは跳躍として捉えられることから、上記のように含意を拡張させるというねらいも、この語は担っている。

さて、その「…とわかっている、でもやはり×××」というフレーズを議論の核とし、前者に知識や言葉、後者に行為を振り分けて考えたのがこれまでの到達点だったと述べたが、この対比においては、知識のなかに特定の信念をもつことを含んでいたり、人間の身体的動作をとまなう行為のなかに感覚的反応を混在させて考えていたりした。これらを微分し、また人間の活動領域や知覚、運動などの各方面にひらいて検討する必要性が生じる。思い切って単純化して図式化すれば、

「言葉」→「信じる」＋「知る」

「行為」→「行う」＋「感じる」

ということになるだろうか。前者の「言葉」は人間の主知主義的活動の側面から、教義や儀礼体系を頭で理解することを含んだ「信じる」という側面と、一般に知識を獲得したりその獲得した知識を用いたりする「知る」という側面に分けて考えるわけである。それに対して実践的活動の場面において、意識的な身体運動、行為という本来の意味において想定されていること一般としての「行う」以外にも、刺激に対する五感を用いた反応としての「感じる」側面を看過することはできない。ただし「感じる」というアクションによって未知の事象を「知る」場合があったり、「信じる」というのが主知主義的な活動にとどまることなくいわゆる信心業のように行為をとまなっていたりする場合もあり、これらは相互乗り入れを特徴としていることが想定される。そのようなクロスオーバーな状況もふくめ、「信じる・知る・行う・感じる」という四つの動詞を手がかりとして考えることには意義があろう。それは、ミクロな場に着目し、現場の人びとの実際のアクションから呪術的实践＝知を具体的に捉えることにもつながるはずだからである。

運動や感覚などをふくんだ多様な活動領域から呪術的实践＝知を考えるのは、呪術とほかの実践＝知を峻別する基準はどこにあるのか、そもそも峻別は可能なのか、といった問いを深めることにもつながる。そして、他の諸実践＝知との併存状況がとりわけ問題になるのは「現代的諸相」であるという点から、「呪術のほうから現代世界を照らし出すとどのような図が描けるか」という課題も、本研究において本格的に検討すべき内容となる。そのような課題に応えるために、「病院医療」、「学校教育」、「メディア」、「科学」など、近代によってもたらされたとされる呪術と現代世界との接合インターフェイスを具体的に検討していくという方法がとられる。

〈近代〉というのは、単なる時代区分というより、日常生活を再編するようなシステム、制度、サービス、ネットワークなどの大規模な変動と捉えておく。90年代の「妖術・呪術のモダニティ論」以来、呪術と近代の関係はしばしば検討されてきたが、その多くは「近代が呪術を生む」側面についてのものであった。この研究では逆のベクトル「呪術が近代を生み出す」側面についても照射できるのではないかと考えている。それは、科学にしても医療にしても、実際には呪術的な実践＝知がもちだされ、あるいはそこに感覚的なものがともなって、〈近代〉が日常世界のなかに定位されていくプロセスの検討という課題を生むことになる。

具体的には、たとえば「学校における知識と実践」は、近代の科学的知識をムラにもたらす機関という意味では、科学→日常のベクトルで捉えることが可能であるが、学校の教員というのは柳田國男の言葉を借れば「ころある村の青年」であって、ムラの生活知を集積する場としても学校は機能している。また、病院で処方される薬を近代医療の知識が十分でないムラの患者が服用する行為は、科学とっていいのか非科学というべきなのか、ではそれが伝統薬ならどうなのか、といった問題も考慮の対象となる。これら現代世界で起こっているさまざまなことは、科学と非科学、呪術と近代、日常と非日常などをハッキリと二分して両者を分断するような方向性よりも、両者がいかに結びついたり相互作用を起こしうるか、という検討のほうに有効性があるのではないか。本研究では、「信じる・知る・行う・感じる」という人間活動の各次元が、その単線的でない相互関係をどのように張り巡らせるかという点から、呪術的实践＝知を考えていく手がかりとした。

くりかえしになるが、この「信じる・知る・行う・感じる」の四つの動詞を引き合いに出すことは、呪術をこの四つでもって厳密に規定できると考えているわけでも、呪術の本質はこの四つの側面であると断言するわけでもない。前回までで「知る」と「行う」の活動領域との関連が明らかになってきたという経緯をふまえ、それをさらに「信じる」と「感じる」を独立したファクターとして設定して、つごう四つで考えていくとどうなるかという初期設定、あるいは提案とでもいいかえてもいいかもしれない。それがどのように充填されるかは、研究の展開いかんによっているといえよう。

この特集の各論文を概観しておきたい。

津村文彦は、シンポジウム当日の発表タイトルは「パオで治るということ——東北タイ

の呪医の治療実践の効果をめぐって」であったが、この特集においては「注射と吹きかけ——東北タイにおける注射医と呪医の治療効果をめぐって」と改題して寄稿している。呪術の効果や呪医による施術が「効果あるもの」として捉えられるというのはいかなる事態なのかという問いに対して、とくに身体に生じる感覚的次元（痛みや吹きかけ）をともなった治療を事例としながら切り込んでいる。津村は、近代医療／伝統医療、科学／呪術、身体／精神といった二分法的思考で呪医の治療サービスを捉えることを再考するために、呪術の効験について「信じるから効く・治る」という地点を吟味すべきだと提案する。その対象として、注射による呪術を用いる「注射医」（モー・チート・ヤー）と、呪文の吹きかけによる治療を行う呪医（モーパオ）に光をあてる。おもに近代医療で用いられる注射は、外部の強力なパワーを取り込むための技術として民間医療にも用いられ、痛みの感覚が「効果」として理解されるという受容の回路によって、注射医は一時流行した。しかし近代医療サービスの普及によって消滅してしまった。それに対してモーパオは薬効が明確ではないものの即効性も認められ、言葉を囁いたり息を吹きかけたりする行為が近代医には代替不可能なこともあって、近代医療との並存が可能である。このように対比的な側面もあるが、注射医とモーパオはともに、感覚に直接訴えかける刺激（注射医の場合は針の痛み、モーパオの場合は熱さや毒が移動する感覚など）をともなっているという点で相通じる部分ももつ。近代医療が生医学的な「成果」によって効果を測定するのに対し、患者自身が受ける感覚によって効果が判断される場合もある。このような感覚的次元をも通して、治療行為の効果を多元的に捉える必要があることを、津村は主張している。

163

つぎに飯田淳子の論文「呪術の効果と感覚的経験——北タイの農村・病院・学校における語りと実践」は、シンポジウム当日の演題「呪術と感覚的経験——北タイの農村・病院・学校における語りと実践から」を部分的に改題したものである。呪術の効果と感覚的経験を中心的課題としている点で、飯田の問題関心は津村のそれと多くの共通性をもっているが、飯田論文において顕著な点は、病院医療関係者や学校教育における教員、マスメディアなど、近代的とされる現象により深く携わる人びとや場面の事例を豊富に積み重ね、呪術と近代という大きな課題に対して「感覚の人類学」の理論的立脚点から考察を試みている点である。感覚に訴える事象、たとえば可視性によって呪術的治療がリアリティを獲得する側面があるいっぽうで、近代医や学校教員などは「科学的」解釈の許す限りで呪術的信念や実践を許容するだけでなく、「合理的」解釈が行き届かない場合でも、感覚的経験を通して能動的でも受動的でもあるような態度をとることがある。その場合、感覚的経験は、言葉と反する行為の基盤になり、際だって先鋭的な呪術的实践となることもあるのである。またメディアを通して宣伝される「伝統薬」が受容されて効果を示す要因には、音声やパッケージなどの感覚情報が鍵を握っている場合もある。これらの事例から、呪術の感覚的経験は〈近代〉とみなされるものを經由することによってむしろ増幅され、その効果は強化された形で人びとに認識されている側面があることを明らかにしている。つまり、近代が感覚に働きかけて呪術を生み出しているのである。

第三の論文「呪術的实践＝知の歴史的諸相——西欧近世の魔女信仰の視角から」は歴史

学者・黒川正剛によるもので、タイトルはシンポジウム演題と同じである。執筆者のなかでは唯一歴史学からのアプローチであり、全体テーマの「現代的諸相」をあえて「歴史的諸相」としてその守備範囲を示している。このように読み替えることで、黒川は呪術的实践＝知にとって大きな背景となる「西欧の近代化」の問題を正面に据えた議論を展開する。悪魔が関与する業として意義づけられてきた西洋社会の呪術的实践は、「魔術」という言葉がより適切であることをひとつの歴史的生成として示すとともに、魔女裁判の記録から、視覚的には確認されることのない「魔術」が現実あるいは真実として認識されるにいたる歴史的過程を検討する。そして近著『魔女狩り——西欧の三つの近代化』[黒川2014]に沿って、西欧における近代化経験の諸側面から呪術／魔術的实践を検討する。まず、見て確認することから生ずる認識は、黒川自身の言葉では「視覚の特権化」であり、西欧における近代化経験のひとつとして重要である。17世紀以降、可視的な物質性やリアリティが問題とされるようになった経緯には、デカルト的科学主義による視覚・観察の重視があった。それは「自然認識の変容」とも関連している。神に反する行為としての「反自然」は魔女の業と同様のものとされたが、それが科学的観察の対象としての自然へと変容するのである。さらに、異端・ユダヤ教徒・女性といった「他者」の複合的表象としての魔女が、近代化の流れのなかで、「視覚の特権化」や「自然観の変容」のもとで解体していくプロセスを読み取ることもできる。呪術的諸実践の「現代的諸相」と「歴史的諸相」を架橋する端緒には、このような三つの近代化の要因が関与していることを、黒川論文は示唆している。

三者三様の資料提供を行いながら、近代に接するような事象においていかに感覚的経験が介在しているかを論じている点でいずれも共通している。この特集では、三者の論文のあとに、島蘭洋介によるコメントを掲載し、近代・科学（医療）・感覚といった本特集の主題にもういちど光をあてる。

近代の制度やテクノロジーが人間の感覚や活動そのものを拡張することは夙に知られている。しかし拡張された感覚で捉えられるものが合理的なものごとだけに限定されるわけではないことは、三者の論考によく示されている。また逆に、呪術的实践＝知によって研ぎ澄まされた感覚が先行し、その感覚的次元に矛盾しない形で科学的知識や技術が居場所を定めていくという方向性も追究できよう。このように「近代が呪術を生む」側面と「呪術が近代を生む」側面は表裏一体であって、近代／伝統とか、合理／非合理といった二元論的思考を再考するような展開も、ここから拡がるかもしれない。

<付記>

京都人類学研究会におけるシンポジウムならびに本特集は、科学研究費補助金「東南アジア・オセアニア地域における呪術と科学の相互関係に関する文化人類学的研究」（課題番号 25300054、研究代表者・白川千尋）の研究成果の一部である。また、7月のシンポジウムのあと、10月より発足した国立民族学博物館共同研究「呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して」（代表者・川田牧人）の立案段階および初年度の議論もこの特集には反映されている。謝意を表したい。

<参考文献>

- 阿部年晴・小田亮・近藤英俊編 2007 『呪術化するモダニティ——現代アフリカの宗教的实践から』風響社。
- 黒川正剛 2014 『魔女狩り——西欧の三つの近代化』講談社。
- 白川千尋・川田牧人編 2012 『呪術の人類学』人文書院。
- 白川千尋 2012 「言葉・行為・呪術」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp.9-45。
- 阿部年晴・浜本満・杉下かおり・坂井信三・田辺繁治・関一敏 1997 「特集「呪術再考」『民族学研究』62(3):340-407。
- 関一敏 2012 「呪術とは何か——実践論的転回のための覚書」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp.81-112。
- 浜本満 2007 「妖術と近代——三つの陥穽と新たな展望」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編『呪術化するモダニティ——現代アフリカの宗教的实践から』風響社、pp.113-150。

Douglas, Mary ed. 1970 *Witchcraft, Confessions and Accusations*. London and New York: Routledge.

Kapferer, Bruce ed. 2003 *Beyond Rationalism: Rethinking Magic, Witchcraft and Sorcery*. New York: Bergham.

**The Various Aspects of Magical “Practice-Knowledge” in the Contemporary Setting:
Focusing on the Relationship between Science/ Medical Technology/ Religion and Others**

Makito KAWADA

This special issue has its origin in a symposium held by the Kyoto Anthropological Research Group on the 12th of July, 2014 in Kyoto University. This symposium aimed to clarify the positioning of magic in contemporary circumstances of knowledge/practices and examine the usefulness of its concept in that setting. Here, we would like to dig into the problem more and try to understand magic from the angle of “practice-knowledge” in the contemporary world, in which magic is remarkable for its coexistence or adjacency with ‘other’ practice-knowledge such as science, medical technology, religion, education, and mass media.

All three contributors of this special issue are the speakers of the symposium, and at the same time, the authors of “*Anthropology of Magic*” published in 2012 (eds. by Chihiro Shirakawa and Makito Kawada), in which discussions of our collaborative studies on magic in the past ten years are

reflected. In this book, we share a critical mind about how the incidents of magic are experienced by the persons who are concerned and how they appear along with reality for them, together with a reconsideration of the topic of “magic and modernity”, which prospered in the 1990s. To approach the core of the matter, we focused on the phrase, “I know ..., but still ...” at the center of the thought and practice of magic. It is possible to distribute knowledge on the side of “I know” and practice on the other side of “but still”, and we can regard magic as acts bridging between knowledge and practice.

While many discussions unfolded, the following issues were left unfinished;

- (1) A relationship with other practices (science, medical service, religion, etc.)
- (2) Problems of palpability and materiality that can be shared with the anthropology of sense and anthropology of materiality.

It is the main concern of this special issue and the present collaborative study by us to make progress on these tasks from the viewpoint of “practice-knowledge”. It is the concept encompassing both knowledge and practice, including dimensions of sense and belief. This concept develops the concluding point of previous studies that the phrase, “I know ..., but still ...” makes a bridge between knowledge and practice and intends to capture the significance of magic in the contemporary setting. For this purpose, we will see the dichotomy of ‘knowing’ and ‘acting’ more precisely and differentiate them into four dimensions; ‘believing’, ‘knowing’, ‘acting’, and ‘feeling’. Articles in this special issue are going to understand magical “practice-knowledge” concretely by paying attention to the micro scene of the people concerned.

In the article by Fumihiko Tsumura, the “efficacy” of cures by injection doctors and blowing doctors in Northern Thailand are examined through the experiences of physical senses such as pain. Whereas many problems of sensory experience of cures are common with Tsumura’s paper, Junko Iida’s paper especially focuses on contemporary scenes such as the hospital, school, and mass media. And Masatake Kurokawa discusses the sense of sight based on the historical documents of witches in early modern Europe. After three articles, Yosuke Shimazono gives comments mainly from the point of view of medical anthropology.

Together with the “practice-knowledge” connection in sensory experiences, this study sheds light on the side that magic produces modernity, which is in contrast with “magic (and witchcraft) and modernity,” namely modernity producing magic, a point made in the 1990s. It is the main concern of contributors that modern technology and knowledge (such as science, medical care, and school education) tend to be performed in a normal position in everyday life through a process in which magical “practice-knowledge” is invoked and its sensory dimension is accompanied. It is also possible that magical “practice-knowledge” subtilizes sensory experiences, and scientific knowledge and technology can establish a place to stay in form without contradicting its sensory dimension. In other words, we are going to regard magical “practice-knowledge” as phenomena occurring in the contemporary world.